



Title	《不安》と《心配》のコロケーション：政治家のスピーチ・コーパスDWDS：Politische Reden (1982-2020) から
Author(s)	中川, 裕之
Citation	ヨーロッパ超域研究. 2025, 6, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《不安》と《心配》のコロケーション
—政治家のスピーチ・コーパス DWDS: Politische Reden (1982-2020) から—

中川 裕之

“Anxiety is a natural part of life.” (NIH 2023)

0. はじめに

世の中に《不安》がうずまいている。個人や社会も同様である。コロナ禍以降、物価高や世界の多極化が一段と加速した (Emperle 2023)。インフラの老朽化、社会保障制度の問題点の顕在化、民主主義やジェンダーなど社会の価値観の流動化、若者の自己肯定感の低下など、古今東西を問わず、《不安》は最重要のキーワードのひとつである。

《不安》に似た語に《心配》がある。本稿ではこの両語にほぼ相当するドイツ語の *Angst* と *Sorge* (英語の *anxiety* と *worry*) の二語をメインターゲット—中心語 (node, 大神 2017: 48) —とし、心理学や精神医学などの言語使用域 (レジスター Register) における語彙相互の位置関係 (Konstellation) を明らかにした上で、《不安》と《心配》のコロケーション—*Angst* と *Sorge* のペア配列のふるまい—を実証的に考察する。今回は DWDS¹ 内の、政治家のスピーチ・コーパス—*Politische Reden (1982-2020)*—を利用する。そこから抽出されるのは、次のような文である：

(1) *Es herrschen auch Angst und Sorge, Unverständnis und Zorn.*² (不安や心配、無理解や怒りもまた猛威を振るっている) (Michael Roth, 24.11.2015)

具体的には、単数形の《*Angst und Sorge*》や複数形の《*Ängste und Sorgen*》といったペア配列が、均等に分布し、出現しているのか、それともなんらかの偏りを見せるのかを、コーパス言語学的観点から考察する。その際に、各配列が有する傾向や特徴を詳述する。

1. 《不安》とは — キルケゴール『不安の概念』(1844) から

デンマークの思想家セーレン・キルケゴール (Søren Kierkegaard 1813-1855) の『不安の概念 dt. *Der Begriff Angst*』(2019 [1844]) からの引用で議論をはじめ。キルケゴールによると

¹ Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache の略称が DWDS。ベルリン・ブランデンブルク学術協会 (Berlin-brandenburgische Akademie der Wissenschaften) の大規模コーパスのポータルサイトを指す。

² 例文中の下線は本論筆者の中川が付与した (以下同様)。

「日常的な言葉づかいで言えば、ひとは何となく不安」(2019: 79)であるし、「人間は不安から逃げ出すことはできないが、不安から逃げようとする。なぜなら人間は不安を愛しているから」(2019: 80)と言う。また《不安》は動物には不安は見いだされない人間に特有な感情(2019: 77)なのだから《不安》を人間だけに備わった特性と位置づける。

さて、高所やへびといった、特定の脅威や危険に直面した時に生じる感情は《不安》と呼べるのか。ドイツ語の *Angst* について書かれた、ある心理学辞典の一文を見てみる：

(2) *Angst* ist eine überlebensnotwendige Reaktion auf gefährliche Situationen. (不安とは、危険な状況に直面したとき、生きのびるために不可欠な反応である) (Dorsch 2021)³

たとえば藤永(2013: 660)は、《不安》とは「日常生活の中で、漠然とした特定できない曖昧な脅威を察知したときに、自我の危機としてだれもが経験する心的反応であり、不確定性と無力感を伴う心理的状态である」という。この定義によれば、高所やへびは、漠然とした特定できない曖昧な脅威ではなく、特定の脅威(や危険)なのだから、これらに遭遇したときに生じる感情は、単に《不安》と称するだけでは、不十分なのかもしれない。

1.1. 《不安》— フロイトの中核的概念

ジークムント・フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) はオーストリアの精神医学者としてあまりにも有名である。そんなフロイトの「理論の中でも中核となるものの一つが不安に関するものである」と山崎はいう(2006: 2)。フロイトは典型的な症例として「小さなハンス」の馬恐怖症 (der typische Fall der Pferdephobie des kleinen Hans (Freud 1971 : 246 (1926 [1925]); 大宮/加藤訳 2010: 26)) の事例を挙げながらこう述べる：「問題は馬に対する不特定の不安ではなく、馬が彼を噛むだろう、という特定の不安の予期なのだ (Es handelt sich (...) gar nicht um eine unbestimmte *Angst* vor dem Pferd, sondern um die bestimmte ängstliche Erwartung)」(Freud *ibid.*; 大宮/加藤訳 *ibid.*)。このときフロイトが考える《不安》には二種類—特定の《不安》と不特定の《不安》—がある。特定の《不安》とは、高所やへびのような特定の脅威との遭遇によって生じる《不安》であり、フロイトの言う「馬が噛むだろ

³ Dorsch とはドイツ語による包括的な『ドルシュ心理学辞典』の略。本稿ではオンライン版を使用した。

⁴ 藤永(2013: 660)は「フロイトは1926年に『不安の問題 *Hemmung, Symptom und Angst*』の中で「不安を現実的不安と神経症的不安に区別した。現実的不安 *Realitätangst* とは、脅威の原因が個人の外界にある事象に対して、潜在的に予測される危害や心理的苦痛に対する内的反応である。これに対して、神経症的不安 *neurotische Angst* とは、個人内の内的衝動によって引き起こされる不安である」として《不安》を区別している (Sabater 2021 は上記2タイプに加えて道徳的不安 *Moralische Angst* を加えている)。ちなみに大宮/加藤訳の『フロイト全集 19』(2010)では„*Hemmung, Symptom und Angst*“は「制止、症状、不安」と訳されている。また、前病的不安から病的不安に至るスペクトラムについては後節の第3節を参照のこと。

う」といったたぐいの《不安》である。他方、不特定の《不安》とは、藤永（2013: 660）の言うところの「漠然とした曖昧な脅威」に対する《不安》である。それは、フロイトの言う「馬（一般）」に対する漠たる《不安》、不特定の《不安》に相当する。

1.2. 《不安》の語場 — 《恐怖》や《心配》の位置関係 (Konstellation)

《不安 Angst》は、《心配 dt. Sorge; engl. worry》や《恐怖 dt. Furcht; engl. fear》のような類義語や関連語とともに、ひとつの語場 (Wortfeld) を形成する (図 1 参照)。語場とは「語彙要素がその中において互いに規定しあいながら意味を紡ぎ出す語彙構造」 (荻野 2012: 88) のことである。図 1 は《Angst》の語場を示す一例で、複数の新聞雑誌のコーナー (政治、経済、金融、学術、文学、スポーツなど) に登場する《不安》関連の語彙を整理・分類したものである。この図 1 には、われわれが目する、もう一方のキーワード：《心配 Sorge》が含まれていない。だがしかし、《心配》という語も《不安》と密接にかかわる重要語彙であることは、先にあげた例文 (1) からして、言を俟たない。

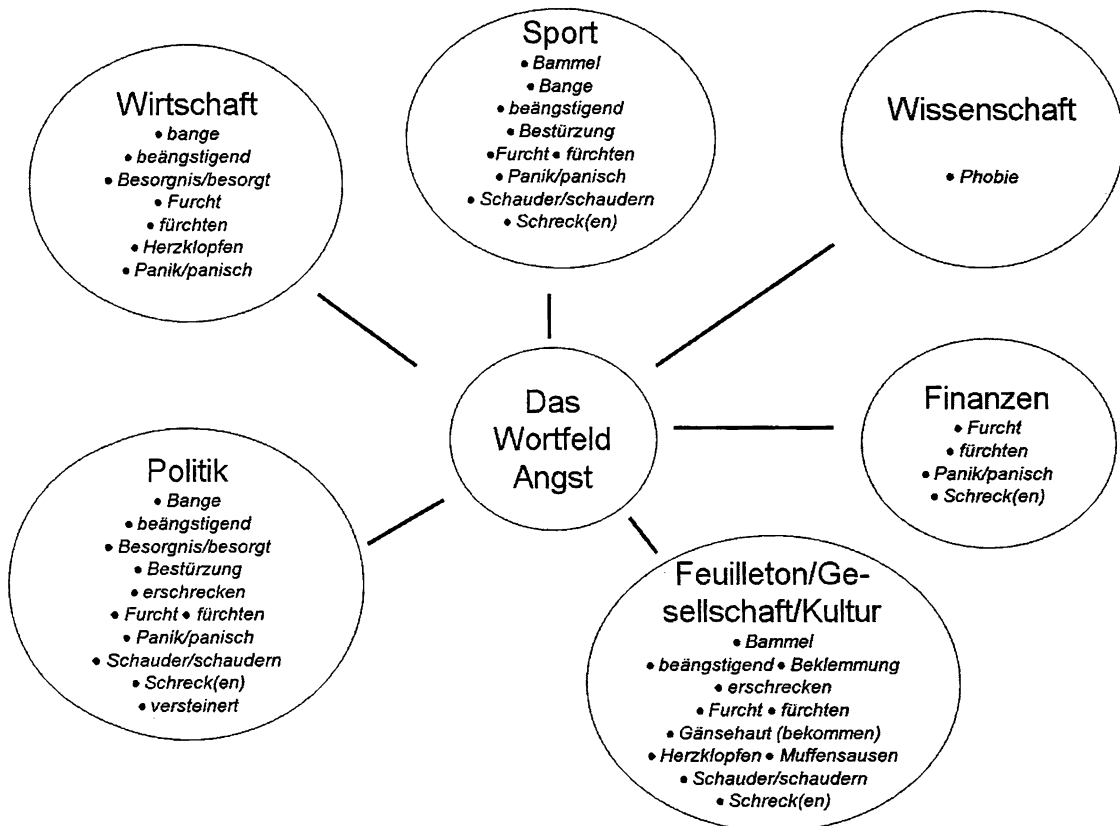


図 1 Vorkommen einzelner Wörter aus dem Wortfeld Angst in *Frankfurter Rundschau*, *Der Tagesspiegel*, *Die Welt*, *Die Zeit*, *Zeit-Magazin* im September 2011 in verschiedenen Ressorts – ohne die häufigen Angst, Sorge, Nervosität/nervös. (Henn-Memmesheimer 2012: 27 より引用)

われわれはここで各種辞書や辞典における《不安》の記述に目を向ける。日本語の『新明解国語辞典第八版』(山田/倉持ほか編 2020)によれば、《不安》とは「不結果(最悪の事態)に対する恐れに支配されて、落ち着かない様子」である。『明鏡国語辞典第三版』(北原編 2021)によれば、「悪いことがおこりそうで気がかりなこと。またその気持ち」とある。つぎに、英語の MedlinePlus (2025)⁵によると、“Anxiety is a feeling of fear, dread, and uneasiness. It might cause you to sweat, feel restless and tense, and have a rapid heartbeat.”(不安とは、恐怖におびえ、落ち着かぬ感情で、汗ばみ緊張し、いたたまれなくなり、胸の動悸をおぼえる場合もある)と書かれている。ドイツ語の有名な心理学辞典 Dorsch (2021)によると《Angst》は „Zustand, gekennzeichnet durch Anspannung, Besorgtheit, Nervosität, innere Unruhe und Furcht vor zukünftigen Ereignissen.“ (緊張 (Anspannung) や不安 (Besorgtheit)、いらいら (Nervosität) した不穏な気持ち (innere Unruhe) で、将来の出来事に対する《恐怖 Furcht》に特徴づけられた状態である)と説明されている。これらの記述をまとめれば、《不安》とは、良くない結果が起こる未来を思い煩うネガティブな感情であり、場合によってはめまいや動悸といった身体症状を伴う、というくらいになるのかもしれない。

1.2.1. 《不安》と《恐怖》のちがい

《不安》と《恐怖》のちがいは何か。Dorsch (2021) には „Bei klarem Bezug auf das Angst auslösende Objekt wird auch von Furcht gesprochen.“ (不安を引き起こす対象が明確な場合には恐怖という語が用いられることもある) (Wenz 2006: 2 も)。藤永によれば《恐怖》とは「高所やへびなど、特定の脅威や危険に対する心配の感情」であり「生体がその状況をいくらかコントロール可能なものとして予期しているときに起こりやすい」が、「その状況がコントロールできないものとして知覚されると不安が生じる」(2013: 664)という。いかえれば、藤永は、当該感情を引き起こす対象が明確でコントロールできそうな場合には《恐怖》、対象が不明確でコントロールできなさそうな場合には《不安》という。ならば、本論冒頭のわれわれの問い—高所やへび、馬に対峙したときに生じる感情—はただ単に《不安》と呼ぶよりも《恐怖》の方が、より近いのかもしれない。その際、《恐怖》は《不安》に包摂される部分集合のような関係になる。

1.2.2. 《不安》と《心配》のちがい

では《不安 Angst》と《心配 Sorge》のちがいは何か。双方とも本論のターゲット・ワードである。日本語の『新明解国語辞典第八版』(山田/倉持ほか編 2020)によれば《心配》は

⁵ MedlinePlus はアメリカ国立衛生研究所 (NIH: National Institutes of Health) の一部門で、患者などのために国立医学図書館 (NLM: National Library of Medicine) が提供する世界最大のオンライン情報サイトである。

「気にかかることがあって好ましくない結果になるのではないかと心を悩ますこと」という。『明鏡国語辞典第三版』(北原編 2021)によれば「現在の状態、これから先のことなどが気がかりで、心を悩ませること」という。ドイツ語の *Duden-Online-Wörterbuch* (2025)によると „Sorge“ は „bedrückendes Gefühl der Unruhe und Angst“ (不穏や不安といった陰鬱な感情) という。日本語の専門語辞典—加藤/保崎ほか(編)の『新版精神医学事典』(1993)や藤永(監修)の『最新心理学辞典』(2013)—をひもといても、《心配》という語句は見出し語レベルでは掲載されていない。《不安》や《恐怖》はそれぞれ詳述されている。この《心配 Sorge》という語の、言語使用域(レジスター Register) (貝森 2016: 65) は、学問的、というよりはむしろ日常的なそれだろう。両語のこうした差異がわれわれの関心を惹きつける。⁶

上記を踏まえて《不安 Angst》と《心配 Sorge》を区別しているドイツ語の例を見てみよう。ゲッティンゲン大学医療センターで教授兼精神科医のボルヴィン・バンデロー (Prof. Dr. Borwin Bandelow) は、とあるインタビューで両語を用いて次のように説明している：

- (3) Ich unterscheide immer zwischen Angst und Sorge. Angst ist, wenn man zum Beispiel eine Panikattacke bekommt mit Herzrasen, Luftnot und Schwindel. Sorge, wenn man morgens die Zeitung aufschlägt und schon wieder nur schlechte Nachrichten drinstehen. Dann fühlt man keine körperlichen Symptome. (Bosch BKK 2025) (私はいつも《不安》と《心配》を区別します。動悸、息苦しさ、めまいのようなパニック発作があれば《不安》と呼び、毎朝、新聞をめくって悪いニュースばかりが目に残るようなときには《心配》と言います。後者(=心配)の場合には身体症状は生じません。)⁷

当該のインタビュー内で、バンデローの発言の受け手(読み手または聞き手)として想定されるのは、インタビュアーを介しての、患者やその家族といった一般人である。彼の語感(Sprachgefühl)によれば、身体症状が出現するほどに高じた感情は《不安》、これに対して、日常のありきたりな悩みは《心配》と呼んで、区別しようとしている。

次に取り上げる Intermountain Health (2025) の記述例も、専門家向けというよりは、患者やその家族などの一般読者層に向けて書かれた、平易で啓蒙的な説明文である：

- (4) “Think about worry and anxiety as the opposite sides of a spectrum. One way to know if your worry has moved into anxiety is your ability to put the brakes on and get it under control. If you can get it under control, it’s more likely to be worry. If getting it under control is harder, this could be a sign that it’s moved into anxiety.” (《心配 worry》と《不安 anxiety》はスペクトラムの両サイドだとお考えください。心配が不安に移行したかどうかを知るひとつの方法はコント

⁶ *Duden-Online-Synonym-Wörterbuch* (2025) には Sorge の類義語として Angst[gefühl], Bangigkeit, Befürchtung, Besorgnis, Beunruhigung, Furcht, Unruhe; Argwohn, Bangnis, Bekümmernis, Herzenangst などが載っている。

⁷ Bosch 社健康保険組合の „Mit Angst und Sorgen umgehen“ (不安や心配の対処の仕方) からの文章である。

コントロールできるかどうかといった点にあります。コントロールできれば心配である可能性が高く、コントロールできなければ不安に移行したと見なします。つまりコントロールできるかどうかは《心配 worry》と《不安 anxiety》を見分けるサインなのです。）

ここでの《心配 worry》は、セルフコントロールできる状態を指し、《不安 anxiety》は《心配》が高まってセルフコントロールできないレベルに至った状態を指している。この文章でも、セルフコントロールの可否にもとづき、平常（ノーマル）な《心配 worry》と、平常でない《不安 anxiety》とが、使い分けられている様子が見てとれる。

以上、《不安》《恐怖》《心配》といった相互に関連する一連のタームを比較・検討してきた。これらの語彙の使い分けには次の点が重要だった：（１）《不安》には、特定の対象がある場合（藤永 2013: 660）と、特定の対象が無い場合がある（Freud 1926 [1925]; 藤永 2013: 664）。（２）特定の対象がある場合に《不安》は《恐怖》と言いかえることができる（キルケゴール 2019: 77; Wenz 2006: 2）。（３）《不安》にはセルフコントロールできる軽い《不安》とセルフコントロールできない（身体症状のある）重い《不安》がある（藤永 2013: 664）。（４）《心配》は日常生活での軽い《不安》を指すが、心理学や精神医学といった専門的な言語使用域（レジスター）では使用されにくい（ただし専門家による一般向け説明文では用いられる場合もある）。

2. ドイツ語辞典（Deutsches Wörterbuch）における用例記述

本節ではドイツ語の言語辞典（*Duden-Online-Wörterbuch* 2025, *PONS-Online-Wörterbuch* 2025, 濱川/信岡（監修）2022『クラウン独和辞典第五版』）に掲載されている用例記述の具体例を確認する：Sie hatte Angst, ihn wiederzusehen. 彼女は彼に再会することを恐れていた、Sie brauchen keine Angst zu haben. 心配なさる必要はありません、Machen Sie sich keine Sorge. 心配しなくていい、Nur keine Sorge! / Sei ohne Sorge! / Keine Angst! 心配するな、Er hat auch seine Sorgen. 彼にも悩みはある、j3 Sorge machen …に心配をかける、j3 Angst [und Bange] machen …をこわがらせる、など。

《Angst 不安》や《Furcht 恐怖》⁸、《Sorge 心配》の対象を明示したい場合には、vor や um, über に導かれる前置詞句を用いて表現できる：Angst um j4 haben …のことが心配だ、Angst vor et3 (j3) haben…を恐れている；die Furcht vor dem Tod 死の恐怖、aus Furcht vor Strafe 刑罰を恐れて；Mach dir [darum / darüber] keine Sorgen. [そのことは]心配するな、die Sorge um das tägliche Brot 日々の生活の苦勞、Sorge um die Zukunft 将来に対する心配、Auf ihm

⁸ Furcht や Schrecken（雅）は恐怖や不安の対象を属格で表すことができる：Schrecken des Todes 死への恐怖、Furcht des Herren 主を畏れる気持ち（濱川/信岡（監修）2022『クラウン独和辞典第五版』）。

lastet die bange Sorge um den Arbeitsplatz. 彼は職場の悩みで気が重い；Besorgnis [um j3 / über e4] zeigen…を心配（憂慮）する、など。⁹

Angst, Furcht, Sorge — および関連語の Schrecken, Besorgnis, Unruhe, Bange (adj. bange) など — は、前置詞を伴い無冠詞または定冠詞付きでも用いられる：in Angst geraten 不安に陥る、e4 mit der Angst zu tun bekommen 不安に駆られる、j4 in [Angst und] Schrecken versetzen …をぎょっとさせる；vor Furcht 恐怖のあまり、j4 in Furcht versetzen…を恐怖のどん底に突き落とす；in Sorge (um...) が心配だ、Er war in großer Sorge um seine Kinder. 彼はこどもたちのことを大変心配した；e4 mit Besorgnis betrachten…を心配（憂慮）しながら眺める、et1 erfüllt jemanden mit Besorgnis…が不安で…の頭がいっぱいだ；j4 in Unruhe versetzen…を不安（不穏な状態）に陥れる；Mir ist bange vor ihm (um ihn / nach ihm). 私は彼がこわい（彼のことが心配だ / 彼が懐かしい）、など。¹⁰

以上、いくつかの代表的なドイツ語辞典 (Wörterbuch) に収録されている《Angst 不安》《Furcht 恐怖》《Sorge 心配》および関連語の、用例記述の具体例を確認し俯瞰した。

3. 《不安》のスペクトラム — 境目はどこに？

上述した通り《不安 Angst》が心理学や精神医学、哲学などの領域で頻繁に取り上げられる重要タームであることには異存あるまい。ボン大学病院 (Universitätsklinikum Bonn) のホームページに次のような記述がある：„Angst ist ein normales Gefühl. (...) Doch wo liegt die Grenze zwischen normaler Angst und einer Angsterkrankung?“（不安はノーマルな感情だが、ノーマルな不安と病気の不安の境目はどこなのか？）（UKB: 2025）。この発想は上掲例文 (4): “Think about worry and anxiety as the opposite sides of a spectrum.”（《心配 worry》と《不安 anxiety》はスペクトラムの両サイドであるとお考えください）にも通じる。すなわちここ

⁹ DWDS の Politische Reden コーパスからの例：i) Die Besorgnis um die Sicherheit in Europa wächst. （ヨーロッパの安全保障に対する懸念が高まっている。Heiko Maas, 08.01.2019）；ii) Besorgnisse über die globale wirtschaftliche Entwicklung nehmen zu. （グローバルな経済発展に対する懸念が高まっている。Wolfgang Schäuble, 06.09.2011）

¹⁰ DWDS の Politische Reden コーパスからの例：i) Nach den Ereignissen in Thüringen in der letzten Woche sind viele Bürgerinnen und Bürger des Landes in Sorge um den Zustand unserer Demokratie, um die Verlässlichkeit und Stabilität unserer Regierungsarbeit. （先週のチューリンゲン州での事件の後、国民の多くは自国の民主主義や政府の信頼と安定性を懸念している。Franziska Giffey, 12.02.2020）；ii) Es ist furchtbar, dass Menschen in Angst leben müssen, auf der Straße Opfer wahlloser Gewalt zu werden. （人々が路上で無差別暴力の犠牲になる不安を抱えて暮らさなければならないとは恐ろしいことだ。Frank-Walter Steinmeier, 01.02.2016）；iii) Heute blicke ich mit Besorgnis auf den Zustand unserer Welt. （今日、私は世界の状況を憂慮している。Simonetta Sommaruga, 21.01.2020）；iv) Unsere Welt heute ist eine Welt in Unruhe. （今日の世界は混迷の中にある。Angela Merkel, 07.07.2016）

での《不安》はグラデーションを有するスペクトラムなのである。笠原（1981: 4）も「健康と病気の境目あたりに位置すると思われる「軽い」精神的不適応」と言っており、「境目」に着目している。そこを越えると病気になる、それが境目なのである。

3.1. 前病的な《不安》から病的な《不安》へ

《不安》と《恐怖（恐れ）》のちがいについて、笠原（1993: 690）は「（不安とは）漠然とした未分化な恐れ的情感。不安は多少とも身体的表出を伴い、動悸、胸部絞扼感、発汗などから瞳孔拡大に至る多彩な自律神経症状を呈する」という。Player & Peterson (2011) も身体的表出に着目して「不安はネガティブな感情として定義され、緊張や心配といった心理的特徴と動機や胸部不快感といった身体的特徴から成り立つ」という。このプロセスを図式化すると、図2として、あらわすことができるだろう：

図2 ノーマルな不安 → 過度な不安（や恐怖） → 病的な不安（神経症（障害¹¹））

《不安》の度が増すにつれて、ノーマル（前病的）な状態から、いわゆる境目を越えて、病的 (pathologisch) な状態、すなわち神経症 (engl. neurosis; dt. Neurose) へ移行する。

3.2. DSM-IV（およびV(または5-TR)）における《不安》

病的なレベルに至った《不安》は、1994年の『精神疾患の診断・統計マニュアル』第4版 (DSM-IV)¹² によれば不安障害（不安神経症とも）(dt. Angststörung; engl. anxiety disorder) と呼ばれる（藤永 2013: 660）。はじめはありきたりでノーマルな心的状態だった《不安》が、徐々に不適応のレベルへ高まって、しまいには日常生活に支障をきたすようになる。加えて、動悸やめまい (Wingenfeld 2018: 9)、失神といった重い身体的症状が現れるようになると、パニック発作（障害）(dt. Panikattacken; engl. panic attack, panic disorder) と呼ばれる（厚生労働省 2025）。ここで言われるパニックとは「予期せぬ出来事に遭遇したときに見られる、突発的な恐怖や不安から引き起こされる心理的な混乱状態」（藤永 2013: 266, 660）のことである。いいかえれば《不安》とは「コントロール不可能な事態が長く続けば、さらにどうにもならない状態に陥り、抑うつ (dt. Depression / engl. depression) へと変わってく

¹¹ 最新の DSM-5-TR から日本語版では「障害」の使用を控えてかわりに「症」が用いられるようになった。

¹² DSM-IV とはアメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association) が定めた精神疾患の診断・統計マニュアル “Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders” 第4版を指す。DSM-I は 1952 年、DSM-II は 1968 年、DSM-III は 1980 年、DSM-IV は 1994 [改訂版 2000] 年に公開された。DSM-IV で不安障害は、全般性不安障害 (GAD)、強迫性障害 (OCD)、心的外傷後ストレス障害 (PTSD)、急性ストレス障害 (ASD)、パニック障害、社交不安障害、特定恐怖症などに分類されている (Saß, Wittchen, & Zaudig 1999; 藤永 2013: 664)。また、2013 年に公開された DSM-V では不安障害とは別に強迫症に新たな診断カテゴリーが設けられた。

る（藤永 2013:664）。たとえば、不安の原因や状況が限定されている対人恐怖（症）— 社交恐怖、社交不安（症、障害）（dt. soziale Angst (-störung, -phobie); engl. social anxiety (disorder, phobia)¹³（日本精神神経学会 2014: 436）とも— は「他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、対人関係から身を退こうとする神経症の一型」である（朝倉 2015: 414）。不安の原因が多岐にわたって特定できないような場合には「全般性不安障害（全般不安症）（dt. Generalisierte Angststörung; engl. GAD: generalized anxiety disorder）と呼ばれる（Becker & Hoyer 2005: 4）。¹⁴ 《不安》とは、日常的でありふれた《心配》の前病的な段階にはじまり、特定の対象に対する《恐怖》とよばれるような感情を包摂しつつ、身体的症状を有する病的な段階に至るまでの、一定の幅を持ったスペクトラム（加藤/保崎ほか編 1993: 691; Strian 1995: 7）なのである。以上、本節では、精神医学のガイドラインで現在も改訂されつつある各種 DSM の記述をもとに、精神医学（や心理学）における《不安》関連の語彙について、精神病理的観点からの内容把握を行った。

4. 個人の《不安・心配》から社会の《不安・心配》へ

「現代社会では、人間関係の問題や、仕事上の過重な負担、経済的不安、病気などの心理的・社会的なストレスの原因がますます増大しており、不安の社会病理は社会の至る所で蔓延している」（藤永 2013: 660）。もともとは、個人的で日常的なタームであった《不安》だが、その適用範囲が少しずつ拡大されて、集団や社会にうごめく《不安》としても使用されるようになった。社会や集団に、健康上の不安（や心配）（gesundheitliche Sorgen）や、物価高による生計不安（や心配）（dt. finanzielle Sorgen; eng. money worries）が高まっている様子をレポートする記事（Grahn 2022）もしばしば散見される。

(5) Wir alle haben Ängste, sei es vor Armut, der Klimakrise oder Krieg. Wenn unser Angstlevel steigt und die Angst als Alarmreaktion nicht mehr reguliert werden kann, werden wir krank. （貧困、気候変動や戦争に私たちはみな不安をかかえている。不安の度が増し、危険を告げるシグナルとしての不安が、コントロールできなくなると病気になる）（Dismer & Brück 2023）

例文（5）は、《不安》というネガティブな感情が個人にとどまらず集団や社会に共有されるほどに高まっている様子を描き出している。このときの《不安》は、貧困や気候変

¹³ ドイツ語では基本語に前接または後接されて複合語へ拡張される：前接：Angst + Phobie = Angstphobie 不安症（Angsterkrankungen と）；後接：Höhen + Angst = Höhenangst 高所恐怖（症）、Agora + Phobie = Agoraphobie 広場恐怖症（Freud 1971: 253）；Angstbeschwerden 不安による苦痛、Angstproblem 不安の問題、Angstneurose 不安ノイローゼ、Angsttheorie 不安理論 など（Pirée 2003: 156）。

¹⁴ 過剰な不安や心配がみられる日がみられない日よりも多い状態が 6 カ月以上にわたり認められることを特徴とする。アルコール使用症、うつ病、パニック症の患者に併発することが多い（Barnhill 2023）。不安障害のなかでも全般不安症は特に不眠の合併が多い（眞田陸/栗山 2018）。

動、戦争、新型コロナウイルス感染症などといった社会のさまざまな出来事に対する複数形の《不安 Ängste》である。それらが漠たる《不安》として、一群の雲のようにまとまっているようにさえ見える。若者は将来に、老人は晩年に《不安》を抱えている。¹⁵

5. 政治家のスピーチ・コーパス — DWDS: Politische Reden (1982–2020)

本研究の調査基盤として用いるコーパスは DWDS の Politische Reden (1982–2020) である。このコーパスは現代ドイツにかかわる重要な政治家たち—アンゲラ・メルケル、ヘルムート・コール、ヨハネス・ラウ、ジグマー・ガブリエル、フランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー、ヨアヒム・ガウク、イエンス・シュパーン；シモネッタ・ソマルーガ（スイス）など—のスピーチ（Rede）から構成されている。国民の意見を代弁する彼らの発言の数々から、ドイツ語圏における個人と社会の不安の所在も見えて取れる。《不安 Angst》や《心配 Sorge》は、これまで見てきたとおり、一般人はもとより、心理学や精神医学の専門家たちのあいだでも、使用の際にいろいろゆれのあるタームであるが、政治家たちの発言であれば、より一層、概念定義上、ゆるい使用が予想される。しかしだからこそ、身近に住まう人々の、等身大の日常生活に沿ったかたちの言語実態が見て取れるのではなかろうか。次節では、Angst と Sorge のコロケーションに着目し、その分析・分類を行いながら、各ペア配列の出現頻度と傾向を示したい。

5.1. „Angst und Sorge“? oder „Sorgen und Ängste“? — ペア配列、単数形と複数形

研究対象の Angst と Sorge のコロケーション—ペア配列—を検討する際に、Angst 先行タイプを AS 配列、Sorge 先行タイプを SA 配列と呼ぶ（以下同様）。組み合わせを定めるには、単数形 (Singularform, 以下 sg. と略) と複数形 (Pluralform, 以下 pl. と略) を考慮せねばならない。さらに、Angst の複数形の Ängste は、与格 (Dativ, 以下 dat. と略) で語尾に -n が付加される (Ängsten になる) ため判別しやすい。すると Angst と Sorge の配列の組み合わせは、理論上、12 通りとなる。以下に表 1 として列挙する（各行右端は出現回数をあらわす）：

¹⁵ こども家庭庁 (2024: 81) が日本の若者に、仕事に対する現在または将来の不安について尋ね、《不安》と答えた割合は、収入 (72.6%)、仕事 (70.8%)、人間関係 (67.7%) の順で高値となっている。ドイツやスイスなどヨーロッパでも「うつ病や不安障害、強迫性障害などの精神疾患をかかえる若者の数が、ここ数年、急増している」という（穂鷹 2023）。

AS 配列 (Angst 先行型) グループ¹⁶

AS 1.	Angst (sg.) und Sorge (sg.)	13 件
AS 2.	Angst (sg.) und Sorgen (pl.)	4 件
AS 3.	Ängste (pl.) und Sorge (sg.)	0 件
AS 4.	Ängste (pl.) und Sorgen (pl.)	39 件
AS 5.	Ängsten (pl. dat.) und Sorgen (pl.)	4 件
AS 6.	Ängsten (pl. dat.) und Sorge (sg.)	0 件
		計 60 件 (42.3%)

SA 配列 (Sorge 先行型) グループ

SA 7.	Sorge (sg.) und Angst (sg.)	4 件
SA 8.	Sorge (sg.) und Ängste (pl.)	1 件
SA 9.	Sorge (sg.) und Ängsten (pl. dat.)	0 件
SA 10.	Sorgen (pl.) und Angst (sg.)	1 件
SA 11.	Sorgen (pl.) und Ängste (pl.)	66 件
SA 12.	Sorgen (pl.) und Ängsten (pl. dat.)	10 件
		計 82 件 (57.7%)

表 1

対象となる事例の総計は 60+82=142 件であった。この表 1 から読み取れるのは次の通り：
全体的に見て、AS 配列 (Angst 先行型) が 42.3% (60 件)、SA 配列 (Sorge 先行型) が 57.7% (82 件) であった。つまり、SA 配列が過半数を占めているのに対して、AS 配列は半分に届いていない、ということである。これを図示すると、次の図 3 のようになる：

図 3 SA 配列 (Sorge 先行型) 57.7% > AS 配列 (Angst 先行型) 42.3%

上記 12 組のペア配列を出現頻度の多い順 (降順) に並べ直すと、次のようになる：

出現頻度の多い順 (降順)

SA 11.	Sorgen (pl.) und Ängste (pl.)	66 件	(46.5%)
AS 4.	Ängste (pl.) und Sorgen (pl.)	39 件	(27.5%)
AS 1.	Angst (sg.) und Sorge (sg.)	13 件	(9.2%)
SA 12.	Sorgen (pl.) und Ängsten (pl. dat.)	10 件	(7.0%)
AS 5.	Ängsten (pl. dat.) und Sorgen (pl.)	4 件	(2.8%)
SA 7.	Sorge (sg.) und Angst (sg.)	4 件	(2.8%)
AS 2.	Angst (sg.) und Sorgen (pl.)	4 件	(2.8%)
SA 8.	Sorge (sg.) und Ängste (pl.)	1 件	(0.7%)

¹⁶ 各配列グループ内の、各行左端の表示—たとえば AS 1—は、12 通りある配列のうちの、(便宜上) 1 番目の組み合わせである、ということを示している。以下同様。

SA 10.	Sorgen (pl.) und Angst (sg.)	1 件	(0.7%)
AS 3.	Ängste (pl.) und Sorge (sg.)	0 件	(0%)
AS 6.	Ängsten (pl. dat.) und Sorge (sg.)	0 件	(0%)
SA 9.	Sorge (sg.) und Ängsten (pl. dat.)	0 件	(0%)
		計 142 件	(100%)

表 2

この表 2 から読み取れる特徴を順番にまとめると次のようになる：（１）複数形同士のペア配列（SA 11 & AS 4）が約 4 分の 3（66 件+39 件=105 件, $46.5\% + 27.5\% = 74.0\%$ ）と大半を占める。そして（２）単数形同士（AS 1）が 9.2%（13 件）、（３）複数形与格同士（SA 12）が 7.0%（10 件）とつづき、（４）複数形与格同士（AS 5）と単数形同士（SA 7）と単複混合（AS 2）の 3 パターンがそれぞれ同率で 2.8%（4 件）、また（５）単複混合（SA 8 & SA 10）の 2 パターンもそれぞれ同率で 0.7%（各 1 件）と低値（低頻度）だった。そして（６）理論上は組み合わせ可能な単複混合（AS 3, AS 6, SA 9）の 3 パターンは、すくなくとも当該コーパスからは、実例の存在を確認することができなかった。¹⁷

上記諸点を、複数形与格の場合を考慮して、まとめ直すと、こうなる：（１－１）複数形同士のペア配列は上述の通り 74.0%（105 件）と高値（高頻度）だが、複数形与格同士（SA 12 & AS 5）の $7.0\% + 2.8\% = 9.8\%$ （10 件 + 4 件 = 14 件）を算入すれば、さらに $74.0\% + 9.8\% = 83.8\%$ （105 件 + 14 件 = 119 件）となり、8 割超となる。（１－２）複数形同士の場合、SA のペア配列（SA 11 & SA 12）が $46.5\% + 7.0\% = 53.5\%$ （66 件 + 10 件 = 76 件）で、AS のペア配列（AS 4 & AS 5）が $27.5\% + 2.8\% = 30.3\%$ （39 件 + 4 件 = 43 件）となり、その出現傾向には、偏り（SA > AS）が見られる。（２－１）単数形同士（AS 1 & SA 7）のペア配列は $9.2\% + 2.8\% = 12.0\%$ （13 件 + 4 件 = 17 件）と低値（低頻度）である。（２－２）この単数形同士の場合、AS 1 のペア配列が 9.2%（13 件）で、SA 7 のペア配列が 2.8%（4 件）のため、その出現傾向には、偏り（AS > SA）が見られる。（３）単複混合の場合（AS 2 & SA 8）では、 $2.8\% + 0.7\% = 3.3\%$ （4 件 + 1 件 = 5 件）と、SA 10 の 0.7%（1 件）の 4%（計 6 件）にとどまった。つまり、単複混合のペア配列は、稀で出現しにくい、という傾向が見られた。

5.2. 《不安》と《心配》のコロケーション

本節では表 2 の順一出現回数の多い順（降順）に具体の例文を示す。出現頻度の低いパターンでは、なぜ少ないのか、といった興味から、むしろ読者の関心が高いことが予想されるため、二文ずつ挙げる（一文しかないケースは一文のみ）：

¹⁷ だからといって、他のコーパスにおける当該配列の存在は否定しない。さらなる検証が必要である。

SA 11. Sorgen (pl.) und Ängste (pl.) :

(6) Aber es gibt auch Sorgen und Ängste bei unseren Nachbarn in Ost und West. (しかし隣り合う東西の地には懸念もある) (Wolfgang von Geldern, 25.01.1990)

上例は SA 配列 (Sorge 先行型)、複数形同士のペアで、66 件 (46.5%) と最多である。

AS 4. Ängste (pl.) und Sorgen (pl.) :

(7) Es gibt Ängste und Sorgen in der Bevölkerung. (国民には懸念がある) (Helmut Kohl, 24.04.1998)

上例は AS 配列 (Angst 先行型)、複数形同士のペアで、39 件 (27.5%) と 2 番目に多い。

AS 1. Angst (sg.) und Sorge (sg.) :

(8) Ich sage allen Menschen, die Angst und Sorge haben. (不安を抱く人々すべてにお伝えします) (Angela Merkel, 13.03.2014)

上例は AS 配列 (Angst 先行型)、単数形同士のペアで、13 件 (9.2%) と 3 番目に多い。

SA 12. Sorgen (pl.) und Ängsten (pl. dat.) :

(9a) Europa lässt Euch mit Euren Sorgen und Ängsten nicht alleine! (ヨーロッパは不安を有するみなさんを放ってはおきません!) (Michael Roth, 29.01.2014)

(9b) Diesen Sorgen und Ängsten ist unbedingt Rechnung zu tragen. (そのような懸念はかならず顧慮されねばならない) (Filippo Lombardi, 28.11.2012)

上の 2 例 (9a & 9b) は、SA 配列 (Sorge 先行型)、複数形同士のペアで、10 件 (7.0%)、出現数は 4 番目になる。(9a) は前置詞 mit に導かれた前置詞句、(9b) は機能動詞句 (FVG: Funktionsverbgefüge) の、et3 Rechnung tragen (～を顧慮する) に要請された与格目的語の出現例である。

AS 5. Ängsten (pl. dat.) und Sorgen (pl.) :

(10a) Stattdessen müssen wir mit jenen über die Frage sprechen, was ist gerechtfertigt, was davon nicht und wie gehen wir mit diesen Ängsten und Sorgen um. (そうではなく、われわれはみなさんと話し合わねばなりません、何が正しくて、何がダメなのか、われわれはそんな不安をかかえつつ、どう行動すべきなのかを) (Sigmar Gabriel, 07.11.2017)

(10b) In Wahrheit geht es um Grundsätzliches, zum Teil um Existenzielles, wenn im Leben Schicksal, Zufälle, Unzulänglichkeiten zu Erkrankungen, Krankheiten, Leid, Ängsten und Sorgen führen. (実際、根本的で部分的には実存にもかかわる大問題なのです：生きる上で、運命や偶然、医療不足のせいで、罹患し、苦しみ、不安に陥るような時には) (Jens Spahn, 23.03.2018)

上の 2 例 (10a & 10b) は AS 配列 (Angst 先行型)、複数形同士のペアで、4 件 (2.8%) と少ない。(10a) は前置詞 mit に導かれた前置詞句、(10b) は諸要素列挙の一部である。

SA 7. Sorge (sg.) und Angst (sg.) :

(11a) Menschen in Sorge und Angst hören den Ruf: "Fürchtet euch nicht!" (不安にとらわれた人々はこんな叫びを聞くだろう:「おそれるな!」という声を) (Horst Köhler, 25.12.2008)

(11b) Natürlich haben die Menschen bei uns Sorge und Angst. (私たちのところにいる人々はもちろん不安を抱えています) (Angela Merkel, 22.02.2007)

上の 2 例 (11a & 11b) は SA 配列 (Sorge 先行型)、単数形同士のペアで、4 件 (2.8%) と少ない。(11a) は前置詞 in に導かれた前置詞句、(11b) は対格目的語の例である。

AS 2. Angst (sg.) und Sorgen (pl.) :

(12a) Ich weiss, das macht Vielen Angst und Sorgen. (そのことが、多くの人々を不安にさせている、ということを私は知っています) (Doris Leuthard, 01.08.2017)

(12b) Ich weiß um Angst und Sorgen vieler Mitbürger, gerade auch junger Menschen, die in diesen Debatten spürbar wurden. (私は承知している、多くの国民が抱える不安を、そして同時に、この討論会で存在感をあらわした若者たちの抱える不安を) (Helmut Kohl, 31.12.1983)

上の 2 例 (12a & 12b) は AS 配列 (Angst 先行型)、単複混合のペア (Angst が単数) で 4 件 (2.8%) と少ない。例文 (12a) は対格目的語、(12b) は前置詞 um に導かれた前置詞格目的語の例である。

SA 8. Sorge (sg.) und Ängste (pl.) :

(13) Ja, es ist wahr, es gibt Sorge und Ängste! (そのとおり、懸念はある!) (Wolfgang Schüssel, 08.02.2000)

上例は SA 配列 (Sorge 先行型)、単複混合のペア (Sorge が単数) で、出現は 1 件のみ (0.7%)。es gibt 構文の対格目的語の例である。

SA 10. Sorgen (pl.) und Angst (sg.) :

(14) Wir müssen aber träge Bequemlichkeit genau unterscheiden von der notwendigen Grundsicherheit, die jeder Mensch braucht, damit Sorgen und Angst ihn nicht lähmen. (しかしわれわれは、快適さと、皆に欠かせぬ安全の基盤を、しっかり区別せねばならない、不安のせいで、気力が衰えることの無いように) (Johannes Rau, 12.05.2004)

上例は SA 配列 (Sorge 先行型)、単複混合のペア (Angst が単数) で、出現は 1 件のみ (0.7%)。両語は、副文内の主語として、役割を果たしている。

本論の前半一第 4 節まで一に、主として心理学や精神医学における《不安》や《心配》といったタームの定義や使い分けを、実際の使用例を取り上げながら考察してきた。そのような、いわば学問的な言語使用域（レジスター）での使用時のように、両語の意味内容を丁寧に分別しながらの使用例は、今回の政治家のスピーチ・コーパスからは、あまり採取できなかった。そして、当該コーパスの実例分析から見てきたのは、Angst と Sorge からなるペア配列の数々は、両語をそれぞれ個別にとらえて訳出し、理解しようとするよりも、むしろ二詞一意（lat. hendiadys）の観点から、ひとつのユニットとして把握する方が適切ではなかろうか、といった点である。二詞一意とは、修辞法の一手段であり、並列接続詞 und で結ばれた二語がひとつの意味をなす場合をいう（須部 1999: 59ff.）。むろん、本論で考察してきた各種ペア配列の、両語の並びや、単複の違いから生じるさまざまな変異一バリエーションの豊かさと、出現順序と頻度の傾向（偏り）には、単なる二詞一意とは別の（無意識の）意図が込められているのではないかと考えを巡らせるのだが、それら動機の解明は、今後の研究に委ねるよりほかにない。

6. おわりに

「不安」は人間にとって避けがたい「冒険」であり、不安な気持ちになることがどんなことかを知っておくことこそ、誰もが通過しなければならない冒険ではないか、とキルケゴールからインスピレーションを得た若松（2024）は言う。藤永（2013: 664）と横田/向井（2023: 158）は「加速度的に複雑に変化を遂げている現代社会にあって、不安の原因と誘因、ならびにストレスは増えることはあっても減少することはない。不安の研究は今後、ストレスの問題と絡み合いながら、心理学と隣接する領域と連携、協働しながら発展すると予想される」と述べている。隣接する領域には言語学が含まれる。

本論は《不安 Angst》と《心配 Sorge》のコロケーションーペア配列ーをターゲットに据えて、コーパス言語学的観点から考察を行った。今回、調査対象としたのが政治家のスピーチ・コーパスだったゆえ、これに固有の特徴があらわれた可能性もある。本文中に示した各例文は、政治家によるスピーチという性質上、シンプルで短い文が多かった。今後、別のジャンルのコーパスも視野に収めて、より複雑で、重層的な例文も、分析・考察した方がよいだろう。さらに、Angst とペア配列を形成するもう一方の項としては、今回取り上げた Sorge にとどまらず、たとえば Furcht (Rupprecht & Kellner (Hrsg.) 2012) や Schrecken (PONS-Online-Wörterbuch 2025)、Stress (Schubbert 2022)、Trauer、Depression といったタームも考えられるだろう。さらに、《不安》とは対照的な意味内容を持ったタームー希望や勇気、打開などーについても、同様の観点から統一的な考察が可能なら、一層、包括的な研究へと進展できるはずである。

出典・参考文献

- Barnhill, J. W., Generalized Anxiety Disorder. MSD Manual, 2023. (<https://www.msmanuals.com/>)
- Becker, E.S. & Hoyer, J., *Generalisierte Angststörung*. Hogrefe Verlag, 2005.
- Bosch BKK (Betriebskrankenkasse), Mit Angst und Sorgen umgehen. Interviewee: Borwin Bandelow, Interviewerin: Julia Thom, 2025. (<https://www.bosch-bkk.de/>)
- Bui, E., Anxiety and Stress-Related Disorders. *Focus*, 19(2), Psychiatr Publ., 2021, 173-183.
- Dismer, D. & Brück, A., Stärker als die Angst - Wege aus der Krise. ZDF-Video, 2023. (<https://www.zdf.de/gesellschaft/plan-b/plan-b-staerker-als-die-angst-100.html>)
- DSM-IV (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-4) (『精神疾患の診断・統計マニュアル』第4版 1994.
- Duden-Online-Wörterbuch & Synonym-Wörterbuch. 2025. (<https://www.duden.de>)
- DWDS - Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache. 2025. (<https://www.dwds.de/>)
- Emperle, S., Jugendstudie 2023 - Krisen belasten vor allem junge Menschen. (<https://www.swr.de/>)
- Freud, S., Hemmung, Symptom und Angst. *Hysterie und Angst*, Studienausgabe Band VI, S. Fischer Verlag, 1971; 1926 [1925], 227-308. (「制止、症状、不安」大宮/加藤訳 9-101、加藤敏/石田雄一/大宮勘一郎訳『フロイト全集 19』岩波書店 2010)
- Grahn, S. L., Jugendliche fürchten Ende der Wohlstandsjahre. Studie "Jugend in Deutschland, 2022. (<https://www.zeit.de/gesellschaft/2022-11/jugendstudie-deutschland-sorgen-inflation-krieg>)
- Henn-Memmesheimer, B., Sprechen über Emotionen und Gefühle: neurobiologisch und alltagssprachlich – Das Beispiel Angst. In: Janja Polajnar (Hg.): *Emotionen in Sprache und Kultur*. Ljubljana, 2012, 22-36.
- Intermountain Health, Anxiety. 2025. (<https://intermountainhealthcare.org/>)
- NIH (National Center for Complementary and Integrative Health), Anxiety: What you need to know. MedlinePlus Magazine, Volume 18, Issue 3, 2023 [2019]. (<https://magazine.medlineplus.gov/>)
- NIH (National Center for Complementary and Integrative Health), Anxiety and Complementary Health Approaches. 2018. (<https://www.nccih.nih.gov/>)
- Pirée, S. Die Angst – freudiane Auffassungen und einige therapeutische Konsequenzen, *Psychotherapie 8. Jahrg.* 2003, 156-162.
- Player, M. S. & Peterson, L. E., Anxiety disorders, hypertension, and cardiovascular risk: A review. *International Journal of Psychiatry in Medicine* 41, 2021, 365-377.
- PONS-Online-Wörterbuch. 2025. (<https://de.pons.com/>)
- Rupprecht, R. / Kellner, M. (Hrsg.) *Angststörungen – Klinik, Forschung, Therapie*. Verlag W. Kohlhammer, 2012.
- Saß, H., Wittchen, H.-U., & Zaudig, M., *DSM-IV Handbuch der Differentialdiagnosen*. Hogrefe-Verlag, 1999.
- Sabater, V., Die drei Arten von Angst nach Sigmund Freud, 2021. (<https://gedankenwelt.de/>)
- Schubbert, F., Wie Stress und Angst zusammenhängen. Beavivo, 2022. (<https://beavivo.de/>)
- Strian, F., *Angst und Angsterkrankungen*. C.H. Beck, 2003 [1995].
- UKB (Universitätsklinikum Bonn), Angst und Angsterkrankungen - Was ist Angst? 2025. (<https://www.ukbonn.de/>)
- Wenz, G., „Der Begriff Angst“. Eine Erinnerung an Sören Kierkegaard (1813–1855). LMU München, 2006. (<https://epub.ub.uni-muenchen.de/>)

- Wingenfeld, K., Vorlesung: Psychopathologie und Psychiatrische Krankheitslehre: Angststörungen, Charité Universitätsmedizin Berlin, Klinik für Psychiatrie und Psychotherapie. 2018. (<https://psychiatrie.charite.de/>)
- Dorsch - Lexikon der Psychologie. 20. Auflage. Hrsg.: Wirtz, M.A., Hogrefe Verlag, 2021 (<https://dorsch.hogrefe.com/>)
- 秋谷直矩/川島理恵/山崎敬一「ケア場面における参与地位の配分—話し手になることと受け手になること—」 *Cognitive Studies*, 16(1), 2009, 78-90.
- 朝倉聡「社交不安障害の診断と治療」『精神神経学雑誌』第 117 巻第 6 号 2015, 413-430.
- 大神智春「多義動詞を中心語とするコロケーションの習得」『日本語教育』 166, 2017, 47-61.
- 荻野蔵平「ドイツ語語彙の歴史的発展概説」熊本大学『文学部論叢』第 103 号 2012.
- 貝森有祐「レジスターから見る語彙・構文の選択と英語教育への含意」獨協大学『Encounters』 4, 2016, 65-82.
- 笠原嘉『不安の病理』岩波新書 1981.
- 加藤正明/保崎秀夫ほか（編）『新版精神医学事典』弘文堂 1993.
- 北原保雄（編）『明鏡国語辞典第三版』大修館書店 2021.
- キルケゴール, セーレン『新訳 不安の概念』村上恭一訳 平凡社 2019.
- 厚生労働省 (eJIM: evidence-based Japanese Integrative Medicine) 「不安 Anxiety」 2025. (<https://www.ejim.ncgg.go.jp/>)
- こども家庭庁『我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査』令和 5 年度, 2024. (<https://www.cfa.go.jp/>)
- 眞田陸/栗山健一「不安障害の不眠治療はいかにあるべきか」『精神神経学雑誌』第 120 巻第 7 号, 577-583, 2018. (<https://journal.jspn.or.jp/>)
- 須部宗生「語順固定の英語対句表現—考察」静岡産業大学国際情報学部『研究紀要』第 1 号 1999, 39-68.
- 日本精神神経学会 「DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン（初版）」『精神神経学雑誌』第 226 巻第 6 号 2014, 429-457.
- 濱川祥枝/信岡資生（監修）『クラウン独和辞典第五版』三省堂 2022.
- 藤永保（監修）『最新心理学辞典』平凡社 2013.
- 穂鷹知美「恒常的な危機」の下でメンタルを病むヨーロッパの若者たち, 2023. (<https://synodos.jp/>)
- 山崎尚人『不安障害について』保健のしおり 35 号 東北大学保健管理センター 2006.
- 山田忠雄/倉持保男ほか（編）『新明解国語辞典第八版』三省堂 2020.
- 横田明日香/向井秀文「ストレスと不安の関連の検討」『信州心理臨床紀要』第 22 号 2023, 153-163.
- 若松英輔「心配」と「不安」は似て非なるもの, 2024. (<https://gendai.media/>)